

伊藤一彦歌集『土と人と星』

本田一弘

いのち以前のいのち

著者の第十三歌集。二〇一二年春から二〇一五年春までの自選四六四首をほぼ制作順に収める。このたび本集と評論集『若山牧水 その親和力を読む』とこれまでの全業績に対して第三十八回現代短歌大賞が贈られた。題名に導かれて、「土」と「人」と「星」をうたった作品を読んでみよう。

- ・ふるさとに働き辞儀を守りぬし人の追はれて寂しがる土
- ・汚染され除染されそして放棄されなほ生きをらむ咎なき土は

まずは「土」の歌。ともに震災にまつわる歌だ。津波や原発事故等で人々が故郷を離れ避難したために、土が寂しがっていると伊藤は感じとる。土に人間を見ているといつてもいいだろう。二首目、土には「咎」がないと歌い、土の生を強く肯定している。たしかに土には何の責任もない。原発事故

を生み出したのも人間なのであるから。

- ・百歳のからだのなかは乱世にて何が起るかわからず元氣
- ・パジャマ嫌ひの百一歳の母パジャマ着て病室にをり日知のやうに

次は「人」の歌。集中、さまざまな人が歌われているが、中でも百歳を超えてなお健在の母を歌った二首を引いた。一首目、母という「人」に興味関心を抱きつつ微笑ましく見つめる伊藤のやさしいまなざしが滲んでいる。二首目は「日知のやうに」が何とも言えずおかしい。母の命に、母という存在を超えた聖性を発見したのだ。パジャマを着た聖というのがユーモラスだ。

- ・紫のまろき水茄子さきの世はいかなる女人 冷酒傳かす

この歌も印象深い。酒の肴である水茄子を見てお前はどんな女人だったのか、と問いかけている。「水茄子」も「冷酒」も人間であり、同じ「いのち」を持つ親しい仲間たちなのだ。

- ・星と星うなづきあはず照りゐたり孤独の筒に光降らすや

- ・冬銀河古く新しき光なりいのち以前のいのちかがやかす

最後は「星」の歌。一首目、「星」を古くは「つつ」と読んでいたが、その「星」を擬人的にとらえた歌だ。擬人的というとは、何か作爲的な響きがあるが、伊藤の場合は「星」に生命を見ているのである。擬人法などという枠を超えたもつとスケールの大きい時間と空間の軸に立つて森羅万象を見つめている。星はその一つ一つに存在価値があり、独立して、照り輝く。星という生命体に孤独の「筒」を感じとる伊藤の感性。「星」と「筒」とが一首の中で響き合う。つとつち、「星」が「土」という語と響き合っていると読んでも面白い。二首目、今、目の前にある「光」は何万年も前から星から発せられた「いのち」だ。古くて新しい「いのち」が輝いているのだ。

土と人と星。「と」という助詞に注目したい。「と」は並列を表しており、改めて土人も星も一続きのものなのだということを教えられる。伊藤の、いや伊藤という個人の枠を超えて、時間も空間も超えつつ、「いのち」が持続していく宇宙のエネルギ―をこの歌集から感じとるのである。